

# 認知マッピングに対する制約と日本語の存在文<sup>1)</sup>

酒井 智宏

この論文ではメンタル・スペース理論の枠組みで存在述語の機能が主語名詞句で表される要素のコネクターによる対応物を他の領域に設定することであると主張し、存在述語のこの性質を利用して存在文の可能な解釈と不可能な解釈について論じる。

現場スペースの要素と知識スペースの要素は同一性コネクターまたはカテゴリー・個体メンバーコネクターによって結合され得る。しかし、記述「この／その／あの N」を持つ要素から記述 N を持つ要素へのマッピングは許されない。

絵を実物に結び付ける「この猫はここにいる」という文が個体レベルの同一性を表す読みと下位種レベルの同一性を表す読みとで曖昧になる一方、「この太郎はここにいる」は非文となる(絵を指して「この太郎はかっこいい」が可能であることに注意)。これは「この N」から N へのマッピングの禁止と存在述語のコネクター設定指令とにより説明できる。

**キーワード:** メンタル・スペース理論、認知マッピング、存在文、アクセス原則

## 0 導入

この論文ではメンタル・スペース理論(Fauconnier 1985, 1997)の枠組みで日本語の存在文について論じる。第 1 節では存在述語の意味がコネクター設定指令であることを示す。第 2 節ではアクセス原則適用の可否という点から、指示詞句「この／その／あの N」で指される要素から裸名詞 N で指される要素へのマッピングが禁止されることを論じる。第 3 節では存在述語のコネクター設定機能と指示詞句「この／その／

あの N」から N へのマッピングの禁止という制約を用いて存在文の可能な解釈と不可能な解釈について論じる。

## 1 存在述語の意味

### 1. 1 存在述語の特殊性

一般に叙述はその真偽にかかわらず叙述の対象となる要素の存在を前提とする(Martin 1993)。例えば(1)は「太郎」という名の個体の存在を前提とし、(2)は「猫」という名の種の存在を前提とする。

- (1) 太郎がやってきた。
- (2) 猫はねずみを取る。

この点からすると、存在文は一見奇妙な意味構造を持つ。存在述語が存在を表すとすると、存在文(3)は存在することが前提とされている要素の存在を断定するというトートロジーとなり、(4)は存在することが前提とされている要素の存在を否定するという矛盾となるはずである。しかし、(3-4)は日常的に使われる日本語であり、トートロジーや矛盾は発生していない。

- (3) 太郎がいる。
- (4) 猫はいない。

(3-4)がトートロジーや矛盾にならないという事実の説明には二つの方法が考えられる。第一の方法は、主語名詞句の前提とする「存在」と存在述語の断定する「存在」が別の概念であると考えることである。この立場に立つのは西山 (1994)で、西山は日本語の存在述語が多義的であると見え、(3-4)のような文に現れる「ある／いる」は存在ではなく所在

を表すとする。前提とされるのが「存在」で、断定されるのが「所在」であれば、どこにもトートロジーや矛盾はないことになる。

第二の解決法は、主語名詞句の存在前提が成立する領域と存在述語の存在断定が成立する領域が異なると考えることである。フランス語の *exister*「存在する」を含む文について Martin (1993)はこの立場を取っている<sup>2)</sup>。1.2節で提示する本稿の議論もこの立場に近い。

第一の立場では、存在文の複数の用法は存在述語が持つ複数の語義によるものである。第二の立場では、存在文の複数の用法はその解釈にかかわる領域の性質の違いによって説明され、存在述語そのものにはただ一つの意味記述が与えられる。

## 1. 2 コネクター設定指令としての存在述語の意味

本稿の提案する存在述語の意味は(5)である。

- (5) 存在文 [<sub>S</sub>NP1 が／は[<sub>PP</sub>NP2 に]ある／いる]において、NP1の同定するスペース M1 の要素 a の対応物 a'を PP の設定するスペース M2 に導入せよ。

以下ではこの意味記述を具体的に説明する。

自然言語には個々の言語形式とは独立に、(6)の制約がある。

- (6) 自然言語の意味構築に関する一般原則
- a. トートロジーを避けよ。
  - b. 矛盾を避けよ。

(6)により、(5)においては必ず  $M1 \neq M2$  である。もし  $M1 = M2$  とすると、aの対応物が a自身になってしまい、(5)は結局すでに導入されている a

を導入せよというトートロジーになってしまう<sup>3)</sup>。関数構造の点から言えば、これは a から a 自身への関数、すなわち恒等関数を導入しているのと同じことである。一般に任意の要素 X から X 自身への恒等関数は空虚に存在すると考えられるが、恒等関数は自然言語の意味構築を認可する力を持たない。つまり、恒等関数は無害ではあるが、それが意味論において果たす役割はないということである。したがって、存在文が有意味であるためには、存在述語の設定する関数が恒等関数であってはならず、(5)において  $M1 \neq M2$  である必要がある。

なお、存在述語の意味記述に複数のスペースが関与することは Fauconnier (1985: 149) が英語 exist についてすでに示唆している。

次に、M1、M2 という二つのスペースがいかなる原理にしたがって決定されるかを述べる。まず M2 は二格の PP(後置詞句)の直接支配する NP2 の表すスペースである。Fauconnier (1985) は前置詞句が典型的なスペース導入表現(space-builder)であるとしているが、これは後置詞句にもそのまま当てはまる。PP がスペース導入表現であるということは、通常の NP が主としてあるスペースの要素を同定する機能を持つのに対し、PP に直接支配される NP は要素が導入されるべきスペースを設定する機能を持つということであり、多くの名詞句が文脈によりモノ(entity)を表す場合と場所(空間)を表す場合があるという Lyons (1977: ch. 12) の議論をメンタル・スペース理論の枠組みで再解釈したものとして理解できる。(5)はこのような、通常の NP と PP に直接支配される NP の解釈方略の違いを反映した意味記述であると言える。

一方 M1 は NP1 の探索領域である。坂原 (1996a) によると、名詞句の機能の一つは談話資源(一般的知識領域、談話記憶、発話状況からなる)の要素を同定することであり、それぞれの名詞句にはその指示対象が同定される領域、すなわち探索領域が指定されている。坂原は例えば日本語の裸名詞は談話資源全体を探索し、指示詞句は談話記憶と発

話状況を探索するとしている。本稿では坂原の主張とは異なる(7)の探索領域を仮定する。また、一般的知識領域、談話記憶、発話状況をそれぞれ知識スペース、談話スペース、現場スペースという名称に変更する。

(7) 日本語の名詞句の探索領域

- a. 固有名詞: 知識スペース
- b. 裸名詞: 知識スペース
- c. 指示詞句: コトソは現場スペースと談話スペース、アは現場スペースと知識スペース

本稿の目的は名詞句の探索領域を論じることではないので、(7)そのものを正当化するくわしい議論を行う余裕はないが、固有名詞の探索領域が知識スペースに限られることは、固有名詞がすでに知っている要素しか指せないという田窪 (1989)の議論から明らかであり、指示詞句の探索領域についても春木 (1991)、東郷 (2000)の議論から(7c)に示した通りで問題はないと思われる。最も問題が多いのは裸名詞であるが、裸名詞の探索領域を知識スペースに限定する理由に関しては酒井 (2000)を参照されたい<sup>4)</sup>。

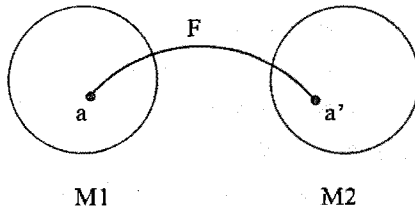
ここで M1 と M2 が決定された場合の例を挙げる。

- (8) 太郎はここにいる。M1: 知識スペース、M2: 現場スペース
- (9) サンタクロースはいない。M1: 知識スペース、M2: 現実スペース
- (10) その人は台所にいない。M1: 談話スペース、M2: 台所

(8-10)において、存在述語の意味は一定であり、常に(5)である。複数

の存在文が異なる種類の存在文であると考えられることがあるとすれば、それは二つの文における M1 または M2 の性質の違いによる。つまり、本稿の考え方では、存在文の意味は多様でも、存在述語の意味は一定である。

最後に、(5)に現れる「対応物の導入」という考え方について述べる。メンタル・スペース理論では、「要素 a の対応物」とは「要素 a とコネクターによって結合された要素」のことである。したがって(5)で述べられている「要素 a の対応物 a' を導入する」という操作は二つの操作に分解できる。すなわち、(i) 要素 a' を設定する、(ii) a と a' の間にコネクター F を設定する、という操作である。この二つの操作が完了した段階で、スペース構成は図 1 のようになる。



M1: 主語名詞句の探索領域、M2: ニ格の PP の表す領域

図 1

1.1 節において、主語名詞句の存在前提と存在述語の存在断定の成立する領域が異なるとする Martin (1993) の説を紹介し、本稿もその立場に近いと述べた。しかし、図 1 を見て分かることは、メンタル・スペース理論による意味記述では、存在文の意味に関わる二つの領域、つまりスペースは全く別々に存在しているわけではないということである。メンタル・スペース理論による意味記述(5)の著しい特徴は、要素 a から要素 a' へのマッピングが存在し、両者がコネクターで結合されると考えることである。この点が第 2 節以降の議論の要となる。

存在述語の意味の一部にコネクター設定が含まれると述べたが、コネクター設定はコンピュータの典型的な意味である(Fauconnier 1985: ch. 5)。これは一般に存在述語と(ある用法の)コンピュータとの間に意味上の共通性があることを示している。これにより(11)と(12)の部分的な同義性が説明できる<sup>5)</sup>。

(11) 香織はここにいる。

(12) 香織はこの女の子だ。

また、西山(1994)が所在コンピュータ文と呼ぶ(13)のような文の存在も自然に理解できる。

(13) おかあさんは台所だ。(西山 1994: 120)

一般にコンピュータ文「NP1はNP2だ」においてNP2が要素ではなくスペースと解釈されるならば、そのコンピュータ文は所在コンピュータ文となる<sup>6)</sup>。さらに、英語のように同一の動詞が存在文にもコンピュータ文にも使われる言語が存在することも自然に理解できる。

(14) Kaori is here.

(15) Kaori is this girl.

以上の議論は、存在述語の意味にコネクター設定が含まれることを正当化する。第2節では現場スペースの要素と知識スペースの要素との間に設定されるコネクターに焦点をあて、その設定に課せられる制約を明らかにする。第3節では、その制約と存在述語のコネクター設定機能との相互作用により、存在文の可能な解釈と不可能な解釈が説

明できることを論じる。

## 2 現場スペースの要素と知識スペースの要素との間の可能なマッピング

### 2.1 現場スペースの要素と知識スペースの要素の結合

我々は現場スペースの要素と知識スペースの要素を結びつけることができる。例えば、(16)を理解するためには「あそこ」にいる人物が自分の知っている太郎であることを理解する必要がある、(17)を理解するためには目の前の個体が自分の知っている猫という種のメンバーであることを理解する必要があるが、我々はこのような作業を瞬間的かつ無意識的に行うことができる。

(16) あ、あそこで太郎が踊ってる。

(17) あ、猫が魚を取って行った。

存在文の意味にコネクタ設定が含まれると考えれば当然予想されることであるが、存在文はこのような現場スペースの要素と知識スペースの要素との結合を述べるために用いられることがある。

(18) ここにタマがいる。

(19) ここに猫/シャム猫がいる。

(18)は現場スペースの個体が知識スペースのタマであることを情報の一部として含み、(19)は現場スペースの個体が知識スペースの猫/シャム猫というカテゴリーのメンバーであることを情報の一部として含む。(18)と(19)の意味構造上の唯一の違いは、現場スペースの要素と知識スペースの要素との間に設定されるコネクタの種類にある。(18)



では(16)と同様に同一性コネクタが設定されており、(19)では(17)と同様にカテゴリー・個体メンバーコネクタが設定されている。

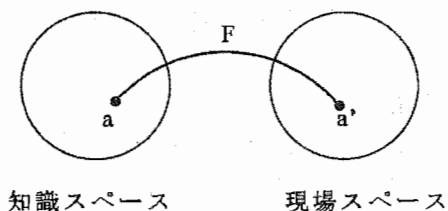


図 2

(18)  $a$ =タマ、 $a'$ =個体、 $F$ =同一性コネクタ

(19)  $a$ =猫/シャム猫、 $a'$ =個体、 $F$ =カテゴリー・個体メンバーコネクタ

同一性コネクタはその名の通り同一の要素どうしを結合する。もちろん、普通は同一の要素が複数の領域に同時に存在することは考えられないから、一般にあるスペースの  $a$  と別のスペースの  $a'$  が同一物であると言う場合、完全な同一性が成立する可能性は初めから放棄されている。例えば(18)では、 $a$  は知識としてのタマであり、 $a'$  は個体としてのタマであるから、その性質は実はかなり異なる。同一性コネクタはこのような差異を捨象したレベルでの同一物どうしを結合する。一方カテゴリー・個体メンバーコネクタは、カテゴリー  $a$  をその個体メンバーである  $a'$  と結合する。このコネクタの正確な定義は酒井(2000)に述べられている<sup>7)</sup>。ここで、(20)の一般化を行う。

(20) 一般に現場スペースの要素と知識スペースの要素を結合するのは同一性コネクタまたはカテゴリー・個体メンバーコネクタに限られる。

ただし、同一性コネクターで結合されている場合も、カテゴリー・個体メンバーコネクターで結合されている場合も、結合される二つの要素が実物とイメージの関係にあることがある。例えば(18-19)はタマや猫／シャム猫とそのイメージを結びつける文であってもかまわない。

## 2. 2 アクセス原則

二つの要素がコネクターで結合されているときには、(21)に示したアクセス原則が発動することがある。これはメンタル・スペース理論において最も重要な原則である。

### (21) アクセス原則(Fauconnier 1997)

二つの対象 a と b とが、コネクター F によってリンクされている ( $F(a)=b$  という関係が成り立っている) ならば、a の名前や記述、また a を指す(指示する)ことによって、a の対応物である b を同定することができる。(三藤 1999: 80)

(18-19)の表す結合が成立しているとき、アクセス原則により知識スペースの要素の記述で現場スペースの要素を同定できるから、(22a-23a)の代わりに(22b-23b)を発話することができる。

(22) a. この猫を黙らせてくれ。

b. タマを黙らせてくれ。

(23) a. この猫を捕まえてくれ。

b. 猫／シャム猫を捕まえてくれ。

## 2. 3 現場スペースの要素から知識スペースの要素へのマッピング に対する制約

アクセス原則の適用方向を逆にすると、(24)を(25-26)の代わりに発話することはできるが、(27)の代わりに発話することはできないことが分かる。

(24) この猫はかわいい。(この猫 $\in$ シヤム猫とする。)

(25) タマはかわいい。

(26) シヤム猫はかわいい。

(27) \*猫はかわいい。

そこで、(28)の制約を設ける。

(28) 「この／その／あの N」で指される要素を要素 N にマップすることはできない。

(20)と(28)により、「この／その／あの N」の指示対象が個体または下位種であり(金水 1990、坂原 1996b)、かつ個体または下位種に限られることが説明できる。例えば、(20)によると、現場スペースの要素「この猫」の知識スペースにおける可能な対応物はその同一性コネクターによる対応物である「タマ」と、カテゴリー・個体メンバーコネクターによる対応物である「シヤム猫」と「猫」の合計三つであるが、(28)の制約により「この猫」から「猫」へのマッピングは阻止されるから、結局現場スペースの「この猫」の知識スペースにおける可能な対応物は「タマ」と「シヤム猫」の二つであるということになる。

制約(28)は根源的には限定表現というものの本質から導かれる制約であると考えられる。Ducrot (1972: 201-202)は文 $\phi$ に現れる表現 $\psi$ が

限定表現として有意味であるためには、(29)の a)、b)のいずれかが満たされなければならないと述べている( $\phi - \psi$ は文 $\phi$ から表現 $\psi$ を取り除いたものを表す)。

- (29) a. 聞き手が  $\phi - \psi$  から  $\phi$  を結論することができない。  
b. 話し手が  $\phi - \psi$  が真であることを保証できない。

例えば  $\phi$  = 「ピエールが英語で講演をした」、 $\phi - \psi$  = 「ピエールが講演をした」(すなわち  $\psi$  = 「英語で」)とすると、明らかに(29b)の条件は成立しない。英語で講演をしていながら、講演はしていない、ということはあるからである。そこで、「英語で」という限定表現が有意味である限り、(29a)が成立すると解釈される。つまり、聞き手は「ピエールが英語で講演をした」という発話を聞いた場合、それが「ピエールが講演をした」という文からは導けない情報を含んでいると解釈するのである。これは「ピエールが英語以外で講演を行うこともありえた」という状況に対応する。今度は  $\phi$  = 「この猫はかわいい」、 $\phi - \psi$  = 「猫はかわいい」(すなわち、 $\psi$  = 「この」)とすると、明らかに(29a)の条件は成立しない。猫一般がかawaiiなら、この猫もかawaiiに違いないからである。そこで、「この」という表現が限定表現として有意味であるためには、(29b)が成立すると解釈される。つまり、聞き手は「この猫はかawaii」という発話を聞いた場合、話し手が「猫はかawaii」を真と考えていない、と解釈する。要するに、「この」が限定表現である限り、「この N」について言われたことがそのまま N について成立しては困るのである。

逆に言うと、「この」が限定表現でなければ、(28)のような制約は適用されない。実際、指示詞は、現場指示、文脈指示、概念指示のすべてにわたって限定的でない用法を持つ。

- (30) a. この俺の言うことが聞けないのか。(現場指示)  
 b. メダカは昔はどこにでもいたものだが、そのメダカが絶滅の危機に瀕しているというから驚きだ。(文脈指示)  
 c. お前はあのアインシュタインを知らないのか。(概念指示)

筆者の観察する限り、(30)に示したような非限定的な指示詞句と通常の限定的な指示詞句とは、音調の違いがあるように思われる。限定的な指示詞句は完全な語アクセントで発音されるが、非限定的な指示詞句は、少なくとも明瞭に発音された場合は、[この:俺]、[その:メダカ]、[あの:アインシュタイン]のように指示詞と名詞との間に軽い休止が置かれる。(28)の制約は語アクセントを持つプロトタイプの指示詞句にのみ適用される。よってこれ以降に登場する指示詞句はすべて限定的な解釈を持つものとする。

### 3 認知マッピングに対する制約と存在文の解釈

#### 3.1 説明すべき事実

目の前にある絵や写真などのイメージは「この N」で指すことができる。例えば、目の前にある猫と太郎の絵について、(31)のように言うことができる。

- (31) a. この猫はかわいい。(イメージについて)  
 b. この太郎はかっこいい。(イメージについて)

次に、目の前のイメージを目の前の個体に結びつける存在文を考えると、(32)のような差が生じる。これはなぜであろうか。

- (32) a. この猫はここにいる。(イメージ→実物)  
 b. \*この太郎はここにいる。(イメージ→実物)

### 3. 2 存在文の定理

存在文の意味記述(5)とアクセス原則を公理と考え、明らかに(33)の定理が成り立つ。

- (33) 定理: 存在文「XはM2にある/いる」が成立するとき、M1内の要素XからM2内の要素Yへの関数または合成関数が存在する。

例えば(34)は知識スペースの「夏目漱石」と現場スペースの個体を結合する存在文であるから、当然知識スペースの「夏目漱石」から現場スペースの個体への関数が存在することになる。これは存在文の意味にコネクター設定が含まれるとする(5)の意味記述からの帰結である。

- (34) 夏目漱石はここにいる。

一方、(35)では、(35)'に示した合成関数が成立する。

- (35) 夏目漱石はここにある。(解釈: 夏目漱石の著書はここにある。)

- (35)' 夏目漱石→夏目漱石の著書→現場スペースの夏目漱石の著書

まず、述語「ある」は夏目漱石そのものには適用できないから、指示トリガー「夏目漱石」に作家からその作品への語用論関数を適用し、指示

ターゲット「夏目漱石の著作」を得る。このとき「夏目漱石」で「夏目漱石の著作」を同定できるのはアクセス原則による。そして、存在述語は「夏目漱石の著作」が現場スペースに対応物を持つことを述べる。こうして、(35)を理解するためには、(35)'に示した合成関数を作る必要がある。

ここで定理(33)が説明する興味深い現象について述べる。1.2節において恒等関数は自然言語の意味構築を認可する力を持たないと述べた。これは(36)が非文であることを説明する。ここでは主語名詞句「この猫」は照応ではなく直示の解釈を受けるものとする。

(36) \*この猫はここにいる。

主語名詞句「この猫」は現場スペースの個体を同定する。存在述語「いる」は後置詞句「ここに」により「この猫」の対応物を現場スペースに導入する。結果としてはこの猫の対応物はこの猫そのものになる。こうして(36)において存在述語の設定する関数は「この猫」から「この猫」への恒等関数となり、(36)は非文となる。

2.3節において現場スペースの要素「この猫」の知識スペースにおける対応物は「タマ」と「シャム猫」であると述べた。これは「この猫」でタマまたはシャム猫を同定することができ、逆に「タマ」または「シャム猫」でこの猫を同定することができるということである(例文(22-26)参照)。ここで、(37)の存在文を考えてみる。

(37) a. タマはここにいる。

b. シャム猫はここにいる。

「この猫」でタマやシャム猫を同定することができるのであるから、(37)を(38)のように言うことができるはずであるが、(38)は非文である。

(38) \*この猫はここにいる。

(38)の意図された解釈を考えてみる。まず、「この猫」にアクセス原則を適用し、知識スペースの要素「タマ」または「シャム猫」を同定する。次に存在述語「いる」が「ここに」という後置詞句により「タマ」または「シャム猫」の対応物を現場スペースに導入する。図3を用いてこの解釈過程を説明すると、「この猫」で「タマ」または「シャム猫」を同定する際に用いられる関数は  $F$  であり、存在述語の設定する関数は  $F$  の逆関数  $F^{-1}$  である。このとき、(33)の予測するように、合成関数  $F^{-1} \cdot F$  が確かに存在する。

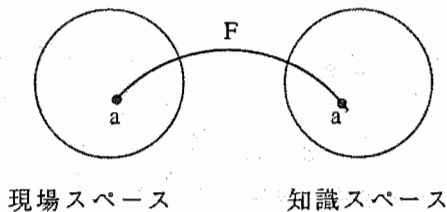


図3

ところが、合成関数  $F^{-1} \cdot F$  は  $a$  から  $a$  への恒等関数であり、トートロジーを禁止する原則(6)に抵触する。(38)と同一の統語形式を持つ(36)では、存在述語そのものが恒等関数を設定しているため、非文法的となるのは当然であるが、(38)では事情が異なる。(38)においてはアクセス原則適用に使われる関数  $F$  も存在述語が設定する関数  $F^{-1}$  もそれ自体では恒等関数ではないから、個々の関数を見ている限り、(38)の非文法性は説明できない。しかし、(33)の定理を用いるとそれが説明可能になる。(6)による存在文の適格性のチェックを(33)の述べる「合成関数」にまで広げればよいだけのことだからである。存在文に限らず、文の適格性は全体のスペース構成を見てチェックされるべきなのである。よ

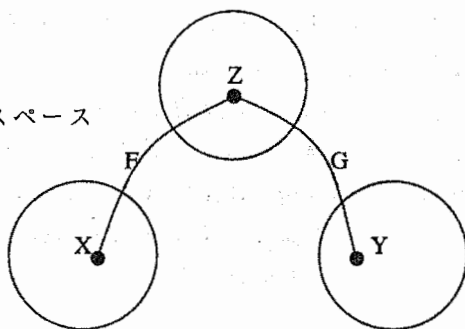


って、(6)のような原則を個々の言語形式に対して規定するのは誤りであるということである。もし「存在述語が恒等関数を設定しているときにはその存在文は非文になる」という原則を立てるなら、(36)の非文法性は説明できるが(38)の非文法性は説明できないということになってしまう。1.2節において(5)のM1とM2が異なるスペースであることを(5)の中には書かず、(5)と(6)の相互作用で導き出すという方略をとったのはこのためである。以下の議論でも引き続き(33)によるスペース構成全体のチェックという方法を用いる<sup>8)</sup>。

### 3.3 存在文の可能な解釈

本節では、(33)の定理を用いて(32)の事実を説明する。(33)より、(32)が成立するためにはイメージ「この猫」、「この太郎」から現場スペースの個体への関数または合成関数が存在する必要があるが、このように目の前のイメージと目の前の実物とを結びつける存在文の場合にはさらに注意が必要である。目の前のイメージと目の前の実物は直接的に結び付けられるわけではなく、常に知識スペースの要素を介して結び付けられると考えられる。イメージと実物の結合において、知識スペースは一種の共通スペース(generic space)として機能する<sup>9)</sup>。これは、図4においてXがYのイメージであるとき、すなわち存在文「XはM2にある」が成立するとき、XとYがZに対して同じ関係を持つ、すなわち同じ種類の二つのコネクターF、Gとがともに成立するということである。Fはアクセス原則適用の際に用いられるコネクターであり、Gは存在述語の設定するコネクターである。

M3: 知識スペース



M1: 現場スペース内の絵

M2: 現場スペース

図 4

絵に描かれているのが三毛猫のタマだとすると、(32a)の解釈の可能性は(39)である。

- (39) a.  $X$ =イメージ「この猫」、 $Z$ =タマ、 $Y$ =個体(=タマ)、 $F$ =同一性コネクター、 $G$ =同一性コネクター、 $G(F(X))=Y$
- b.  $X$ =イメージ「この猫」、 $Z$ =三毛猫、 $Y$ =個体( $\in$ 三毛猫)、 $F$ =カテゴリー・個体メンバーコネクター、 $G$ =カテゴリー・個体メンバーコネクター、 $G(F(X))=Y$
- c. \* $X$ =イメージ「この猫」、 $Z$ =猫、 $Y$ =個体( $\in$ シヤム猫)、 $F$ =カテゴリー・個体メンバーコネクター、 $G$ =カテゴリー・個体メンバーコネクター、 $G(F(X))=Y$

(39a)はイメージと実物が個体レベルで同一である解釈を表し、(39b)はそれらが下位種レベルで同一である解釈を表す。(39a)は「タマはここにいる」と言い換えられる解釈で、イメージも実物もタマであることを要求する。(39b)は「三毛猫はここにいる」と言い換えられる解釈で、

イメージも実物も三毛猫であることを要求するが、個体レベルでの同一性は要求しない。(39c)では種レベルの同一性を表す解釈が意図されている。これはすなわち「猫はここにいる」と言い換えられる解釈であり、イメージも実物も猫であることを要求するが、個体レベルの同一性はもちろん、下位種レベルの同一性も要求しない。例えば、イメージが三毛猫で実物がシャム猫である、という解釈である。これが成立するためには「この猫」を「猫」にマップする関数  $F$  が必要である。ところがこの関数は(28)により排除されるため、(39c)の解釈は成立しない。一方(32b)の解釈の可能性は(40)である。

(40) \* $X$ =この太郎、 $Z$ =太郎、 $Y$ =個体、 $F=?$ 、 $G=?$ 、 $G(F(X))=Y$

(40)が成立するためには「この太郎」を「太郎」にマップする関数  $F$  が必要であるが、 $F$  は(28)により排除されるため、この解釈は成立しない。よって(32b)には可能な解釈が存在せず、非文となる。以上から、(32b)が非文であるという事実と(32a)が(39c)の解釈を持たないという事実は、全く同じメカニズムで説明できることが分かる。

#### 4 結論

この論文で論じたことをまとめると、次のようになる。

- (i) 存在述語の意味にはコネクター設定指令が含まれる。
- (ii) 現場スペースの要素と知識スペースの要素を結合するコネクターは同一性コネクターまたはカテゴリー・個体メンバーコネクターである。
- (iii) 記述「この／その／あの  $N$ 」を持つ要素から記述  $N$  を持つ要素へのマッピングは許されない。

(iv) イメージと実物は知識スペースの要素を介して結合される。

(v) (i-iv)を仮定すると、「この太郎はここにいる」が非文であることと「この猫はここにいる」が「猫は個々にいる」という解釈を持たないことは、全く同じメカニズムで説明できる。

メンタル・スペース理論の特徴の一つは、提案されている概念が非常に一般性の高いものであるということである。本稿では存在述語の意味にコネクター設定が含まれるとしたが、コネクターはもともと存在述語とは独立に提案された概念である。しかし、その概念を存在述語に適用することで、存在述語とコピュラとの関係を自然に理解することができ、存在述語とアクセス原則の相互作用によって文の意味的適格性を説明することもできるのである。

#### 注

- 1) この論文は日本語学会第 119 回大会(於 神戸松蔭女子学院大学)における口頭発表(酒井 1999b)に基づいている。以下の要旨は『言語研究』第 117 号掲載の発表要旨とほぼ同一である。
- 2) Martin (1993)はある場合については一見第一の立場に近い見解を示している。これは、「ある意味では存在しないのと同じだ」という状態を単に「存在しない」と言ってしまう場合である。例えば i)は夫の社会的地位が低かったり、発言権がなかったりするために、「存在しないも同然だ」という状態を表現したものである。ここで *exister* という動詞が表しているのは限定された意味での存在である。つまり、*exister* は存在そのものを表す場合と限定された意味での存在を表す場合とがあると考えられている。

i) *Son mari n'existe pas.* (Her husband does not exist.)

しかし Martin は、叙述が主語名詞句の指示対象のある側面についてのみ

行われる現象が *exister* に限らず自然言語の述語一般に見られると述べており、*exister* そのものが本質的に多義的であるとされているわけではない。また、ここで問題にしている(3-4)のような例については Martin は明らかに第二の立場に立っている。

- 3) この議論はコネクターが同一スペースの異なる要素どうしを結合することはないという前提に立ったものである。本稿ではこの前提が成り立つ例のみを扱うが、すべての場合についてこれが成り立つかどうかは分からない。特に、i)に現れるような役割・値コネクターの性質には不明な点が多い。

i) 日本には大統領がない。

酒井 (1999a)では役割・値コネクターは同一スペース内部の要素どうしを結び付けると考えているが、これが正しいのかどうかは最終的には理論が決定することになる。いずれにせよ、役割・値概念の形式化を行う前に判断すべき問題ではないと考えられる。

- 4) 酒井 (2000)はコピュラ文の疑問形を用いて名詞句の探索領域を決定している。疑問代名詞のうち、「誰」と「何」は知識スペースを探索し、「どれ」は現場スペースを探索する。次のデータから、裸名詞は固有名詞と一つのグループをなすことが分かる。

i) 太郎って誰?

ii) ゲンゴロウって何?

iii) あれってどれ?

iv) \*太郎は誰?

v) \*ゲンゴロウは何?

vi) \*あれはどれ?

vii) 太郎はどれ?

viii) ゲンゴロウはどれ?

ix) あれは何?

- 5) 存在述語が対応物を導入するのに対し、コンピュータはすでにある要素を対応物とする、という点に違いがある。
- 6) もちろんいかなる条件のもとで NP がスペースとして解釈されるのかを明らかにしない限り説明とはなり得ないが、ここでは、存在述語とコンピュータがともにコネクター設定機能を持ち、NPが要素ともスペースとも解釈される可能性があることを考慮すれば、存在述語がコンピュータに取って代わったかのような所在コンピュータ文というものの存在が極めて自然に理解される、という点が重要である。
- 7) 酒井 (2000)ではこのコネクターは「非個体・個体コネクター」と呼ばれている。「カテゴリー・個体メンバーコネクター」あるいは「非個体・個体コネクター」という名称には、一般に、カテゴリーから非個体メンバーへのマッピングは存在しないという事実が反映されている。つまり、「猫」で猫の個体を指すことはできるが、「シャム猫」などの非個体メンバーを指すことはできないということである。
- 8) ここでは「トートロジー」と「恒等関数」を同じように用いているが、実際にはトートロジーの方が恒等関数よりも広い概念である。i)がトートロジーと判断されるのは恒等関数では説明できない。i)はすでに女であることが分かっている対象に女であるという情報を付加している点でトートロジーであるが、このようにトートロジーとは自明な情報の上書きとして解釈することができる。

i) この女は女だ。

1.2 節で述べたように、恒等関数はすべての要素に対して空虚に存在する。存在述語が恒等関数を設定してしまう状況は、存在していることが自明であるものを上書きしている点で、やはりトートロジーの一種であると言える。

- 9) 共通スペースについては Fauconnier (1996, 1997)参照。

## 参考文献

- Ducrot, Oswald (1972): *Dire et ne pas dire*. Paris: Hermann.
- Fauconnier, Gilles (1985): *Mental Spaces*. MIT Press; Cambridge University Press, 1994. (坂原茂他訳『メンタル・スペース』白水社)
- Fauconnier, Gilles (1996): "Creativity in Everyday Language," 『認知科学』 Vol. 3, No. 3, 共立出版、14-27. (酒井智宏訳「日常言語における創造性」 in 坂原茂編 2000, 167-191)
- Fauconnier, Gilles. (1997): *Mappings in Thought and Language*. Cambridge University Press. (坂原茂他訳『思考と言語におけるマッピング』岩波書店)
- 春木 仁孝 (1991) 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞一アノを中心に」『言語文化研究』第 17 号、大阪大学、93-112.
- 金水 敏 (1990): 「「役割」についての覚書」『ことばの饗宴』くろしお出版、351-361.
- Lyons, John (1977): *Semantics*. Vol. 2, Cambridge University Press.
- Martin, Robert (1993): "Sur le paradoxe de la prédication d'inexistence." *Le Français Moderne*, LXI-No.1, 1-10.
- 三藤 博 (1999): 「談話の意味表示」『談話と文脈』岩波講座『言語の科学』第 7 巻第 2 章、岩波書店
- 西山 佑司 (1994): 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 26 号、115-148.
- 坂原 茂 (1996a) 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』 Vol. 3, No. 3, 共立出版、38-58.
- 坂原 茂 (1996b) 「変化と同一性」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第 28 号、147-179.
- 坂原 茂 (編) (2000): 『認知言語学の発展』ひつじ書房
- 酒井 智宏 (1999a) 「認知マッピングと日本語の存在文」TACL4 月度定例会

ハンドアウト

酒井 智宏 (1999b) 「認知マッピングに対する制約と日本語の存在文」日本言語学会第 119 回大会予稿集

酒井 智宏 (2000) 「名詞句の探索領域とコピュラ文の疑問形」『言語情報科学研究』第 5 号 東京大学言語情報科学研究会

田窪 行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志(編)『日本語のモダリティ』、211-213、くろしお出版

東郷 雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『総合人間学部紀要』(京都大学) 第 7 号